慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | Contribution of divergent thinking to community functioning in schizophrenia |
| Sub Title | 統合失調症における発散的思考のコミュニティー機能への関与 |
| Author | 根本, 隆洋 |
| Publisher | 慶應医学会 |
| Publication year | 2007 |
| Jtitle | 慶應医学 (Journal of the Keio Medical Society). Vol.84, No.4 (2007. 12) ,p.15- |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 号外 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069296-20071202-0015 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# Contribution of divergent thinking to community functioning in schizophrenia
## （統合失調症における発散的思考のコミュニティー機能への関与）

根本　隆洋

### 内容の要旨

統合失調症患者は広範囲な領域にわたる認知機能の障害を呈し、それらは社会機能レベルと関連するとされ、中でも流暢性とコミュニティー機能（日常生活、対人関係、作業などにおける自立度）との関連が指摘されてきた。先行研究において我々は、統合失調症における流暢性の障害を発散的思考の障害ととらえ、その障害が統合失調症患者において特徴的であることを明らかにした。当研究の目的は統合失調症における発散的思考の障害とコミュニティー機能との関連を検証することである。

対象はICD-10により統合失調症と診断された外来患者群（統合失調症群）40例（男30名、女10名、平均年齢30.2歳）と、健常群32例（男25名、女７名、平均年齢29.8歳）である。全対象に対し研究内容を説明し文書による同意を得た。

発散的思考を評価するために、３種の流暢性検査（Idea Fluency Test、Design Fluency Test、Word Fluency Test）を施行し、その他の認知機能検査として、Wisconsin Card Sorting Test、Modified Stroop Test、Letter Cancellation Test、Digit Span、Rey Auditory Verbal Learning Test、Mini-Mental State Examinationを施行した。コミュニティー機能は、Global Assessment of Functioning（GAF）、Life Assessment Scale for the Mentally Ill（LASMI）、Social Functioning Scale（SFS）により、精神症状はPositive and Negative Syndrome Scale（PANSS）により評価した。

結果は統合失調症群では３種の流暢性検査の成績が健常群に比べ有意に低下していた。これは先行研究の結果と一致しており、統合失調症における発散的思考の障害が確認された。Modified Stroop Test、Letter Cancellation Test、Rey Auditory Verbal Learning Testの成績も統合失調症群で有意に低かった。発散的思考とコミュニティー機能の関連を検討するために、流暢性検査を含む各種認知機能検査成績および人口統計学的・臨床的データを独立変数、コミュニティー機能の評価値を従属変数とする重回帰分析を施行した。結果は発散的思考の障害が統合失調症におけるコミュニティー機能の障害に極めて密接に関与していた。特に、流暢性検査における言語性課題の成績低下が日常生活の障害と、非言語性課題の成績低下が対人関係の障害と関係が深かった。

以上の結果は統合失調症患者のコミュニティー機能を改善するために発散的思考の能力を標的とした認知機能リハビリテーションの重要性と可能性を示唆するものであると考えられた。

### 論文審査の要旨

本研究は、流暢性検査の成績の質的評価を通じて、発散的思考能力の障害が統合失調症に特徴的であることを明らかにした上で、統合失調症における発散的思考の障害とコミュニティー機能との関連を検討したものである。統合失調症外来患者（統合失調症群）40例と健常群32例に、３種の流暢性検査、および前頭葉機能検査であるWisconsin Card Sorting Test、Modified Stroop Test、全般的な認知機能指標であるMini-Mental State Examination（MMSE）などを施行した。統合失調症群のコミュニティー機能は、GAF、LASMI、SFS、精神症状はPANSSにより評価した。健常群に比して統合失調症群において、流暢性検査における質の高い反応の有意な低下、すなわち発散的思考能力の障害が示された一方で、MMSEなどでは有意な差を認めなかった。重回帰分析による発散的思考のコミュニティー機能への関与の検討では、発散的思考能力の障害が統合失調症におけるコミュニティー機能の障害の重要な決定因子であることが明らかとなり、特に言語性課題の成績低下が日常生活の障害と、非言語性課題の低下が対人関係の障害と関連していた。

審査ではまず、統合失調症群の重症度や知的レベルについて問われ、コミュニティー機能を問題にするため外来通院中の比較的若年の軽症が対象となっており、MMSEの成績から知的にも保たれた群であると回答された。方法に関して、発散的思考の評価における回答の出現順序や制限時間の影響を問われ、経時的な評価も行いそれらの影響のないことが確認されていると回答された。統計学的解析方法で、重回帰分析における発散的思考の各反応の変数独立性について問われ、先行研究で確認されていると回答された。また、統計手法についての助言がなされた。薬物療法の影響については、薬原性錐体外路症状評価尺度を用いて影響のないことを確認したと回答された。発散的思考とコミュニティー機能の関連について、統合失調症に特異的であるか問われ、他疾患においては一定の見解はないと回答された。また両者の関連に及ぼす他の要因や前頭葉以外の影響について問われ、広範な機能であるコミュニティー機能の行動面を主に扱ったため前頭葉機能に着目したが、今後は他の脳機能評価も行いたいと回答された。また統合失調症と前頭葉損傷における発散的思考の相違について質問があり、質的な差異が認められると回答された。なお本知見に基づいて、認知リハビリテーションへの応用を検討していると回答された。

以上、本研究は今後検討されるべき課題を残しているものの、統合失調症の発散的思考の障害がコミュニティー機能の重要な決定因子であることを明らかにし、今後のリハビリテーション手法の発展に有益な示唆を与える点で、臨床的に価値ある研究と評価された。

論文審査担当者　主査　精神神経科学　鹿島　晴雄
内科学　鈴木　則宏　衛生学公衆衛生学　大前　和幸
衛生学公衆衛生学　武林　亨
学力確認担当者：池田　康夫
審査委員長：鈴木　則宏

試問日：平成19年 7月25日